

<目録を考える>

目録をとるということ

— 記録をする意味 —

高橋 美子*

1. はじめに — すべては文字から始まる

図書館はなぜ誕生したか。それは人類が自らの経験を伝え、そこから生まれた知恵を記すために文字が生まれ、やがて神の手にあった知識を創造し始めたからだ。知識は書き記され、蓄積された。ものは集まれば分類し整理され、一定の規則に従って並べられて保管される。知識は磨耗して消滅するものではない。時間が経過しても、再び紐解かれるという性質のものだ。その知識の上にさらに知識が積み重ねられていく。そこから、また新しい分野の知識が派生し、やがて知識の体系が形成される。学術の誕生だ。

文字によって書き記されたもの、すなわち図書は知識を生産し、拡大してきたのである。これらの知識を蓄積し、秩序だった方法で管理し、提供する場所が図書館だ。文字がなければ人類の歴史は遅々として進まなかっただろう。

幼い頃、新聞を跨いで叱られた記憶のある人はいるだろう。私もその一人だ。少し大きくなって本を手荒に扱って叱られたこともある。習字の反古を簡単にごみ箱にすてることもしなかった。これは紙の無駄使いを戒めるとともに、文字はただ紙の上に記された記号ではないという意味であったと思う。

*たかはし・よしこ / 整理課

漢和辞典が引けるようになって自分の名前を引いたときは、いささか憮然としたものだ。美＝太った羊と説明されていたからだ。羊など子供の頃、六甲山牧場で見たことがあるだけだったし、現在でも本州に住む私たちにとって、それほど身近な動物ではない。丸々肥えた羊を美しいと見る感覚は、たぶん多くの日本人は持ち合わせていないのではないか。

古代の中国人が肥えた羊を美しいと見た感覚が理解できたのは、新疆ウイグル自治区北部の阿勒泰市から1時間ほどジープにゆられて訪ねたカザフ族のユルトで羊の塩茹でを食べてからである。肥えた子羊を先祖から伝わるカザフ族の手法で屠殺し、解体して岩塩を放り込んだ鉄鍋で茹でること2時間あまり、これほど美味なるものがあるのかと感激したときに、その感覚が理解できたのである。

この時、文字というものが、それを生み出した民族の生活、文化と固く結びついていることを、頭の中だけではなく身をもって理解したのである。中原から遠く離れた遊牧民の地でというなかれ、中国でも羊は古くから「六畜に在りて、膳に給すものなり」¹⁾とされてきたのである。

それぞれが意味を持つ固有の要素の組み合わせから成り立っている1個の漢字は、それだけで1つの完結した世界を形作っている。漢字が誕生したとき、天は驚き、地は揺れ動いたといわれるが²⁾、漢字で書き記すということは、それを使う人間が森羅万象の様々な世界を手中にすることだからだ。書道が極めて精神性の高い藝術とされてきた理由もここにある。

タイトルも作者名も思い出せないがずいぶん昔に、文字が意思を持ち、学者と語るうちに、やがて学者は今ここにいる自己の存在に疑いを抱き始め、狂気へと追い詰められていくという小説を読んだことがある。

思考が先にあったのではなく、文字が思考を生み出したのだという主張に出会って、文字はそれを扱うものの僕であると当然のように思っていた学者の頭脳は混乱をきたしたのである。学者は古代エジプトかメソポタミアのどこかの都市の哲学者だった。

この話を突然思い出したのは、遡及で中国の古い膨大な叢書を整理していた時だ。旧字で書かれているものなので、学術情報センター(以下、NC)の総合目録データベースに入力しようとする外字(NCの文字セットになく、コンピュータ画面で表示できない文字のこと。画面上では で表

される)だらけである。NCが指定する外字処理の基本辞書である『大漢和辞典』と自分の席との間を日に何度となく往復するうち、ある夜夢をみた。

ハートの女王の法廷でトランプの衛兵たちがアリスの頭上に次々に襲いかかったように、沢山の漢字がハチドリのように虚空に羽を震わせて、私を取り巻いているというものである。彼らに悪意があったかどうかかわからないが、私がアリスのように手で振り払うことはしなかったところを見ると襲撃はされなかったようだ。では友好的な会話がなされたかというところ、そのようなことはなく、ただ双方が黙って対峙していただけだ。彼らが言葉を発さなかったのは、私が古い時代の中国語がわからなかったからかもしれない。このような夢は遡及業務を行なっている間、頻繁に出現し、遡及が終わった今でも時々、漢字の夢を見る。

古今東西の文学の中には、絵の中に閉じ込められてしまった男の話や書物の中に住む男の話、さらには紙魚さえもが、書物を愛する男の前に美女となって姿を現す話などがある。『大漢和辞典』に取り上げられている文字は4万9964字で、その中で最も多い画数は26画である。1個の漢字を構成する要素が突然バラバラに解体して、読んでいる人間を一瞬にして取り囲み、再び結合して1個の漢字に戻ってしまったらどうしよう。人間は偏旁や旁や冠の森に閉じ込められてしまう。漢字の秘密を追ううちに、或いは文字の判読に夢中になっているときに、漢字の中に閉じ込められてしまった学者もいるのではないか。書斎から忽然と消えた学者の消息は書架や書庫の中にあるかもしれない。そう考えると中国の古書や古地図を開くのは少しばかり怖くもあるが、不思議から遠いところに来てしまった現代という時間の中で生きる一図書館員としては、古の世界の住人との遭遇を密かに期待してもいるのだ。

文字は世界というものの隠喩だ。1個の文字が生命を持つものの如く、1つの意思を持つということは本当だ。洋の東西を問わず、作家や詩人とよばれる人たちは、その作品の中で1字の選択、文字のならびに呻吟する。それは彼らが文字の持つ意味を知っているからだだろう。文学作品だけではなく、人名や地名などの固有名詞においても文字は意味を持つ。名前は侵すべからざる個人の聖域であるし³⁾、地名はその土地の記憶と固く結びついているからだ。

言語(文字・話し言葉)は地域、民族の主体意識を体現したものである。国家・民族という概念ができあがってきた近現代以後、戦争において支配者が被支配者の言語を苛烈に奪おうとするのは、民族の主体意識をバラバラにし、消滅させようとする目的においてだ。

インターネット時代の今日、英語は世界語と簡単に言う前に(それはなぜ?、コンピュータと文字の関係は?すべての言語がそのまま表示されるの?異なる言語の人たちと自国言語で双方向受発信は?),たとえ現状はそうであるとしても、だからこそ言語の持つ意味を英語圏以外の人間は深く考えていかなければならないのではないか(考える機会を与えられたことに感謝すべきか。知識は往々にして少数派から生まれるからだ)。

書かれた文字を扱うことをその職業とする人たち、すなわち編集、出版、マスコミなど情報作成、伝達にかかわるものは、このことをもっと意識すべきだ。日本の大学図書館が内外への学術情報の発信基地を掲げるならば、言語の問題は安易に扱うべきではない。なぜなら、日本の大学図書館が扱う情報は、非アルファベット言語である日本語資料が多く、それらは一過性のものばかりではなく、むしろ蓄積する情報が多いからである。

後世に学術の体系を伝えることは、大学およびそれを支える大学図書館の存在目的の一つである。その中で、正確な記録を残すという意味において目録作成が持つ責任は重い。

2. コンピュータと文字 — 漢字について

コンピュータに文字を入力すると、コンピュータはそれをコードで認識して、画面上に表示する。日本語でコンピュータ入力をするための標準的な文字セットとして JISX0201(ラテン文字および半角カタカナ集合)、JISX0208(全角ひらがな・カタカナを含む漢字コード 6,355 字のこと。第1水準、第2水準漢字)がある。NC では上記文字セットに加えて、拡張文字セット(EXC 文字)も使用することができる。

日本語は東アジアの漢字文化圏の一員と見なされるが、漢字文化圏と一口にいても日本・中国・台湾などで使用する漢字はそれぞれ異なる。目録の原則からは、目録は書かれた文字によって記述するものである。中国の

簡体字は簡体字で、台湾の繁体字は繁体字のままで記述されるべきものである。しかし、現在のところ NC には文字セットがないという理由で (1999 年 11 月現在)、簡体字は JIS 漢字に同義の文字があれば置換し、繁体字の目録は往々にして外字が目立つものとなる。ハングル文字は現在、NC で使用することはできない。日本語の図書でもタイトル、著者名等に JIS 漢字にない文字を使っているものはあり、外字規則に従って記述をしている。

コンピュータ上の制限による文字の限定は、とくに日本を含む東アジア地域の図書の目録作成において問題を生じている。とくにと書いたのは、日本ではこれら東アジア地域の図書をその歴史的つながりからも多く所蔵してきたからである。江戸時代の鎖国下においても中国、朝鮮からの書籍を、幕府をはじめとして大名や知識人、富裕層は競って収集してきたし、和刻本とよばれる日本で出版された漢籍も多くあるからだ。

ラテン文字とは成立も系統も全く異なる、漢字のコンピュータ上の文字入力の問題解決は、漸次進められてきているが、コンピュータは元来ラテン文字での入力を想定して作られたもので、文字は進化すると最後は表音文字に到達し、象形文字の原型を未だに留めている漢字は、遅れた文字、劣った文字であるという (ゆえにラテン文字化を進めるべきである) 西欧の言語学者たちの論を、欧米のコンピュータメーカーは実は敷衍し、支持しているのではないかと思うことがある。

このような懐疑を抱き続ける中で待つこと久しく、2000 年 1 月から学術情報センターでは目録システムの多言語対応 (以下、UCS*) が開始される。接続している図書館側は、UCS に対応するために何らかの方策をとる必要があるが、各館が積極的に取り組むことが望ましい。

現在の目録検索画面には、里見 D9808 , D39630 小兵 (以上、人名)、 D 39513 県、 D17186 江 (以上、地名) などが出現して利用者を困惑させている。 で囲まれたものは文字ではない、単なる記号だ。上記にあげた人名の方は想像もつくが、地名の方は、ヨミがカタカナでふされているとはいえ、どんな文字がそこに入るのかわからない**。

NC は積年の懸案事項であった目録システムの UCS 対応に漸く踏み切る

* Universal multiple-octet coded character set : 国際符号化文字集合

** D は『大漢和辞典』の意味。数字は個々の漢字に与えられた文字番号

が、対応は各館に委ねられ、状況によっては、クライアントの端末から当分マークはなくなる。厳しい見方をすれば、オンライン目録が普及して10年余、コンピュータが対応できないという理由で、図書は旧字で表示してあるにもかかわらず、常用漢字に置換して記述したり、□マークで表示してきたことは、利用者への対応というだけでなく、後世に目録という記録を残す責任においても、ひどく不誠実だったのではないかと思う。このことについてNCにすべて責任を押し付けるのは簡単だ。しかし、カタログガーが、ひいては日本の大学図書館がコンピュータと文字、そして目録をとる意味を、それぞれが自らに引き寄せて考えた結果だったのだろうかという疑問は残る。

漢字についていえば、UCS導入がすべての問題を解決するなどと思わないことだ(知識に接するものは常に懐疑的であれ)。『大漢和辞典』には4万9964字の漢字がとりあげられていると書いたが、その大本である『康熙字典』は4万2174字である。そしてUCSでコード化された漢字は中・日・韓あわせて2万902字である。この差をどう考えるか。

手もとの『コンサイス漢字ワープロ辞典』(1998年三省堂刊)の巻末にある「JIS漢字の規格とその周辺」というところに、「(UCSの漢字選択は)文化的、学術的な考慮が少ないため、漢字圏では否定的な評価をする方もすくなくありません」と記されている。

文字はそれが発生した地域の文化と深く固く結びつき、長い歴史を経て現代に伝えられてきたものである。文字セットにないから仕方がない、開発には費用も時間もかかることなどを理由に、20世紀の終わりに生きる私たちが簡単に多くの漢字を放棄してしまってよいのだろうか。そのような選択をする権利と判断できる能力を私たちは持っているのだろうか。

中国は解放後、1958年1月に『簡化漢字』『推广普通话』『制定和推行汉语拼音方案』の3つを柱として文字改革を行うことを宣言した。そのなかで漢字について周恩来は「漢字の前途ということなら、それが千年、万年、永遠に変わらないのか」という問いを發し、「文字は変化する、漢字も長い歴史の間に変化してきたのだ」と、漢字簡化を進める必然性を述べたが、それは当時の国民(6億人)の多くが文盲(80%)という状況におかれていたことがあり、そのことが簡化字推進の一つの大きな理由であった。彼

らは自らの生死に関わる生活の知恵は持っていたが、学習し知識を得る機会には奪われていた。それらの人々が文字を学ぶ時に、漢字の複雑性、その数の多さが障害になったことは想像に難くない。漢字簡化については、「知識を人民の手に」のスローガンの下、文盲減少がその第1の眼目であった。簡化字推進と同時にラテン文字表記化なども試みられていくが、解放前後の中国の思想、社会を指導した政治家や学者たちの多くが西欧留学の経験者であり、彼らが漢字は遅れた言語であるという認識を少なからず持っていたことは興味深い⁴⁾。

漢字簡化やラテン文字表記化は、その後も中国社会で大きく揺れ動き、文字改革はその後、簡化字政策の行き過ぎや文盲の減少などもあって、現在では繁体字・縦書き、簡体字・横書きの両方のスタイルの図書が刊行されている。繁体字による出版は現在でも増え続けており、本文は簡体字でも、タイトルページ、奥付は繁体字という装幀を持つ図書も多い。そこには繁体字でなければ、書くべきことの意図が充分には伝わらないと考える著者や編者、出版者の意思があるのだろう。

簡体字によって知識を身につけた人々が、自国の文化、学藝、歴史の広大なひろがりを実感し、再び繁体字を手にし始めたことは、文字は合理性だけでは変えられるものではなく、為政者や国家が強制したところで簡単に変わるものではないということがわかる。

カードで目録をとっていた時代は、『大漢和辞典』、『康熙字典』にある文字は勿論、両辞典にない文字でもすべて記述することはできた。しかし、コンピュータによる目録ではそれができない。まさにコンピュータは、文字と目録係を緊張関係におき、目録をとることの意味と伝達の責務を考えさせるのである。

3. 目録の機能

コンピュータ目録の時代になって、文字とともに考えなければならないのは、目録情報の品質である。目録情報は公開されインターネットを通じて、遠近を問わず多くの人間がそれを見て利用するからだ。

ここで目録の持つ機能を整理すると4つのものがあげられる。1つ目は

検索機能である。標目は正しく記述されているか？ 2つ目は同定識別機能である。Aという書誌とBという書誌は同じものか否か？ 3つ目は所在指示機能である。図書は何処にあるか？ そして4つ目は、後世への正確な記録の伝達機能である。

目録が作成から提供まで概ね自館利用者のみを対象としていた時代以上に、インターネットが普及し、目録が広く公開されるようになった現代では、目録の4つの機能を意識して目録作成を行なうことが大事である。

目録は引ければ良いのか？ 引けさえすれば良いという声は近年よく耳にする。しかし本当にそうだろうか。これはその目録をどのような利用者が、どのような目的で利用するかということでも考えが異なるところだ。記述する情報量も当然ながらその目録の目的によって違う。

私たちが日常扱っているのは高等教育・研究機関の学術情報の目録である。出版前の未成形情報をも含んだ新刊情報でもなければ、書店の販売目録でもない。学術情報の目録というものは、正確に標目が記述されているか。書誌同定ができるか。その本はどこが所蔵していて、貸借はできるのか否か。そして、それは学術情報の記録として後世に伝えるための情報が正確かつ十分に記述されているか。これらのことが学術目録の重要な要件なのである。引ければ良いということ目録の正確性は必ずしも一致するものではない。

今夏、NC 総合目録データベースの図書書誌数は500万件、所蔵数は4000万件を突破し、参加館の数からみてもNCはいまや日本を代表する巨大な書誌ユーティリティに成長した。しかし、目録の4つの機能からその品質を考えると、問題ははなはだ多いといわざるをえない。

様々な分野でグローバル水準が求められている今日、学術情報も勿論例外ではない。そのような世界の状況の中で、総合目録データベースの品質は、国際的な信頼を得て、研究者の要求に応えられるものだろうか。グローバル化した世界で信頼を得る条件は、各国が自国の製品管理に責任を持つということだ。

次の章で私が取り上げるのは、総合目録データベースの品質とその管理についてである。目録の持つ4つの基本的機能を念頭に述べていきたい。

4. なぜNCの総合目録データベースに参加するか。

明治大学図書館がNCに接続し、1988年にオンライン目録作成を開始して今年で11年目になる。統計を見て見ると1988年度の明治大学図書館の蔵書数は1,256,538冊であり、10年後の1998年度の蔵書数は1,792,157冊である。この数は登録数であり、製本雑誌も含んだ数であるが、10年の間に535,619冊増加したことになる。年刊増加冊数は約5万冊前後である。

1991年の大学設置基準大綱化以降、それまでの細部に渡る法的規制が廃止され、各大学・短大の設立理念・目標に基いたユニークなカリキュラムや教育・研究制度が組めるようになった。規制は諸刃の剣でもあり、数値や基準項目達成が大学運営の主眼とされてしまうことは、ややもすれば大学の質・ユニークな教育・研究の阻害要因にもなりかねない。その意味では規制が緩和され、或いは廃止されたことは、各大学の教育・研究への取り組みや実施能力がどの程度のものなのか、選択をする側にとっても見え易くなったともいえる。

大綱化後の蔵書数の経年変化は、蔵書数が単に基準数値を満たすための数値ではなくなり、自己点検・評価を経た中での数値であるはずであり、明治大学図書館でも除籍業務を積極的に行なう中で、蔵書評価が少しずつ行なわれてきたということがある。そのなかで、後藤総一郎教授*を始めとする歴代図書館長の強い意思で、厳しい財政状況にも関わらず、大学当局に図書の充実の必要性を訴え、大綱化以後の明治大学図書館の個性ある蔵書構築、知の循環体系を標榜した蔵書充実に大きな成果をもたらしたことは、明治大学図書館史に記されるべきものであり、後の利用者からも大いに評価されることだろう。

図書館蔵書の充実(多く持つのではなくて、何を持つかが重要である)は、情報通信環境の整備と共に大学の教育・研究環境に対する一つの見識の現れとみてよい。

さて、明治大学がNCに参加してオンライン目録を作成し始めた当時の参加機関数は、国立34、公立大学0、私立大学7館である。総合目録データベースの書誌数は和書約9万件、所蔵13万件、洋書書誌数約5万8千件、所

*後藤総一郎 / 明治大学政治経済学部教授 / 戦後15代目図書館長

蔵6万3千件である。そして今、手元の『学術情報センターニュース 第49号』(1999年9月刊)では、1999年7月23日現在で参加機関は国立99、公立49、私立323、共同利用機関14、短期大学75、高等専門学校45、その他83、合計688機関とある。ニュースの第一面には前章でもあげたように、図書所蔵数4000万件突破の文字が踊り、「4000万件突破は、ひとえに総合目録データベースの充実を目指して積極的に参加していただいた各参加機関のご尽力の賜物である。この場を借りてお礼を申し上げるとともに、今後なお一層のご協力をお願いしたい。」と結ばれている。

日本を代表する巨大な書誌ユーティリティが、学術情報管理・指導を主務とする文部省主導で始まったことはいかにも日本的だ。このあたりは世界的な書誌ユーティリティである OCLC⁵⁾ などとはその成り立ちからして異なるところである。

NC 総合目録データベース参加館が当初の国立大学中心から私立大学にまで大きく拡大した理由は、日本の学術情報データベースを充実するという社会的使命感だけではなく、蔵書数も少なく経営基盤もあまり大きくない中小規模の大学・短大図書館では ILL への参加は大きな魅力であったはずだ。ILL* が開始された 1992 年以降、参加館が急速に増えていることからそれはわかる**。NC 総合目録データベース参加によって、従来の一館完結型の目録作成形態からコピーカタロギングという業務形態への転換が、目録系の削減、縮小、外注委託の理由となり、人件費抑制という経営的観点からも参加のメリットが大きいと判断されたのだろう。後者の理由による NC 総合目録データベースへの参加は、書誌数が増えるにつれ多くなっていったと思う。そして参加すれば、書誌のダウンロードは無料である。

明治大学図書館が数年前、発注・受入・整理業務の再編成を考えた時、その書誌の品質の問題から(チェック機能がない、レコード調整は年々増加の一途を辿る)、総合目録データベースから完全或いは部分的に撤退をして、品質が高く、書誌件数も NC よりはるかに多い世界的規模の書誌ユーティリティへの参加も選択肢の一つにしたが、NC は無料であるということが、撤退を止めた一つの理由でもあった。

*ILL (Interlibrary loan) オンラインによる相互貸借、文献複写依頼。

**『学術情報センターニュース』第49号(1999年9月17日刊)

5．学術情報の品質とはなにか。

かつて目録の記述、分類付与というのは、司書課程を修了したからといって誰にでもすぐ行なえるというものではなかった。目録の4つの機能を一枚のカードに正確に記述し、内容から分類を付与できるようになるには、ある程度の経験を要したからである。

NCの共同分担目録は、オンライン上に目録があれば、マニュアル通りに操作を行うと自館のコンピュータに取り込むことができるというものである。コピーカタログリングといわれる所以である。コピーとはすなわち複製である。当然ながら一からオリジナルを作成するのに要する時間、人件費と比較をすればずっと少なくてすむ。短期間の訓練で誰にでもすぐコピーカタログリング作業は行なえる。カタログガー育成にかけてきた時間も大幅に縮小される。そして徐々に始まるのが、目録業務の外部委託であり自動登録である。近視眼的な損得計算と利用者対応部門の充実という言葉のもとで、(目録はコピーですむのだから)目録作成の現場からカタログガーは徐々に減ってゆく。

目録は引ければよいという言葉の裏に潜む危うさは、引けなければどうなるのかということ余りに安易に捉えていることだと私は思う。記述された目録情報が正確でかつ必要な条件が満たされていなければ、利用者には資料が渡らないのである。そのことが、研究活動や学習にどのような影響を与えるか。

ある利用者の検索対象となる資料が、10冊あったと仮定する。勿論これは自館の蔵書だけではなく、ネットワークで結んだ図書館の蔵書も含めてということである。しかし、利用者は5冊しか検索できなかった。なぜだろう、旧字と新字の違いかもしれないし(UCS導入以前では漢字統合機能はない)、標目のヨミが違っているのかもしれない。ヨミのワカチのゆれの問題かもしれない。カタログガーがつける単語単位のヨミとシステムのヨミの切り出しが必ずしも同じではないことにも原因があるのかもしれない。

人名などの固有名詞は典拠ファイルが必要であるし、同じ漢字を使ってもヨミが異なる同字地名もある。日本や中国における古典のヨミクセなどは、二次資料を覚えていくためにも新人カタログガーを鍛える格好の材

料だ。固有名詞はやっかいだ。

出版者、発行年月日、頁数、注記など標目以外のところで書誌同定を行なうことはよくあることだ。前付後付頁が記述されていないとか、発行が年までしか記述されていない(同年別月に頁数は変わらないが、何らかの修正されたものがでることもある)などでは、学術図書の目録の条件を満たさないのだ。

各巻に固有のタイトルがない全集や選集で、全集タイトル名と巻数しか目録情報に記述されていなければ、利用者は自分の求める作品が何巻に入っているのかわからないし、CW(内容注記)で各巻の内容が記述されていなければアクセスポイントにはならず、検索しても出てこない。総合目録データベースの基準ではCWは必須ではなく、記述は任意である。しかし、何が必要で何を省いてもよいかの判断ができるのが、専門職といわれるカタログガーだ。だが、任意項目の記述の判断をする以前に、文字を始めとして目録の記述そのものが間違っていれば、図書は書架に埋もれたままだ。

ここで注意しなければならないことは、10冊のうち5冊が検索からもれたことを利用者は知らないということだ。目録の品質の問題は、つまるところ目の前の利用者と将来への学術記録の伝達に大きな禍根を残すものである。

目録は引ければ良いという声を問うていくと、目録は利用者と資料を結びつけるものだから、検索に最低限必要なアクセスポイント(書名、著者、それらのヨミ)さえあれば、目録記述は最小限でよいという声を聞く。しかし、引くためのアクセスポイントと目録の記述は同じものではない。オンライン目録になって引くための目録という部分だけが突出してしまっている。しかし、実際は4つの目録の機能を十分に満たした目録でなければ、資料は利用者に結びつかないのである。

明治大学図書館では1999年4月から新システム移行後、移行した目録の書誌記述とそれに対応するヨミの部分がずれてしまい、現行画面上では記述とヨミが一致しないものが数多く存在している。データは移行されているから検索できるというものの、画面上の目録記述は全く正確ではない。これは機械的に修正できるものは少なく、多くの部分が目視による点検・修正を必要とするものである。

インターネットの拡大によって内外に目録情報が公開される今日、各館におけるOPACの品質管理の責任は重い。書誌データベースの整備は、目立たない地味な仕事である。しかし、OPACが整備されていなければ電子図書館構想など全くの夢にすぎなくなってしまう。引ければ良いという考え方に、オンライン検索に対する無自覚な信頼と、図書館員のサービス精神、ホスピタリティ精神の衰退を感じるのは私だけではないだろう。

(あくまでも)図書館内における目録の意義の低下、経営的判断などによって、目録作成の場は縮小しつつあり、外部業者への目録業務委託が日常的に行なわれるようになった。参加、或いは契約している書誌データベースから自動登録によって目録のダウンロードのみを行なう図書館も増えている。ローカルに一度落としたもののデータ点検はとくにしていませんという図書館の声も聞く。(あくまでも)と書いたのは目録本来が持つ意義 = 4つの機能が低下し、変質したのではなく、現在の図書館の判断ではということだ。

目録作成において専門的知識を持つカタログガーの減少が、実は検索結果が2分の1になった理由である可能性は大きい。そのような大学図書館の現状の中で、NC総合目録データベースの品質はどうなっていくのか。

総合目録データベースの書誌数は1999年7月23日現在で和書約9万件、洋書約5万8千件と日々増加している。しかし、増加を良しとする前に、NC参加館の毎日のレコード調整件数はどのくらいになるのだろう。NCは統計をとったことがあるのだろうか。とったことがないなら、全国の参加館に連絡してレコード調整の内容を項目ごとに分け統計をとるべきだ。レコード調整も目録業務の一環とするならば、自館のレコード調整の統計をとっている図書館も少なからずあるだろう。

明治大学図書館整理課も、和書洋書別にレコード調整の統計を毎月とっているが、けっして少ない数ではない。レコード調整は個々のカタログガーが行なうのではなく、他館からの連絡が混乱しないように和洋とも担当者を決めて行なっている。

レコード調整はやっかいだ。解釈の相違もあるし、何回か督促をしても、問い合わせに梨のつぶての館もある。担当者は辞めましたからわかりませんなどという答えが返ってくることもある。外注業者がかかりましたから

ねえ、どうもすみませんなどと電話口で謝られてしまうこともある。中国書の問い合わせを作成館である中国地方の国立大学図書館にしたときは、「異動があって現在、中国語のわかる人がいないのでどうぞ、おたくの館で自由に修正して下さい。」といわれたこともある。旧帝大のある図書館に問い合わせをしたときは、うちは一切レコード調整を受け付けていませんなどと、けんもほろろに電話口でいわれたこともある。返す言葉もないというのはこのことだ。たぶん、誠実に目録作成をしている多くの図書館が多かれ少なかれこのような経験をしているのだと思う。

当然ながら他館への問い合わせは十分に調査をしたうえで行なう。解釈の相違が考えられれば、こちらの根拠もしっかりと伝えられなければならないし、文字やヨミの相違ならば典拠とするところも知らさなければならない。レコード調整にかける(日本の学術情報データベースを良くしていこうとする)倫理観は往々にしてほろ苦い思いをさせられているのは事実だ。

NCはタダであるという理解は必ずしも正しいものではない。カタログガーがレコード調整にかける時間と労力を金額に換算すれば決して安いものではないはずだ。

レコード調整ばかりではない。コンピュータ目録とカード目録の大きな違いは、コンピュータ目録は機械的な制限を設けなければ、書き換えが匿名のままに、いつでも行えることである。明治大学図書館が最近経験した事例は、著書が多くある中国人著者名の典拠レコードのヨミが書きかえられて、今回入力したものと、以前NC経由でローカルに蓄積したヨミが異なってしまったのである。

総合目録データベースには「図書書誌レコード修正指針」が定められ、それに従って修正を行う決まりであるが、あきらかにルール違反である修正をされた場合でも、修正過程の履歴が残らないので(修正レコードは最後に修正した参加館IDしか記録されていない、最新修正館が必ずしも問題の修正をしたわけではない)、問い合わせの仕様がなないのである。

これだけ膨大になった書誌データベースの質を相互信頼だけで維持していけるなどというのは欺瞞であり、幻想であると思う。人間の思索、経験、事実の蓄積を文字によって記した図書、その図書の目録を正確にとり、図

書を後世に伝達していくのが図書館の存在目的であると考えるとき、将来の学術に対してあまりにも無自覚なのではないだろうか。

6．基礎固めから高品質化へ

設立から10年余り、NC総合目録データベースはその規模と参加館の数では、日本で最大の学術情報の書誌ユーティリティに成長した。日本において高度情報化が急速に進んだ20世紀最後の20年は、総合目録データベースの基礎を固め、学術情報サービスの拡大を目指す時期であった。また、内外にその存在を示すことが大きな目標であったかと思う。その目標は十分に達成できたのではないか。

では、目の前の21世紀には、総合目録データベースはどのような状態であってほしいか。それは高品質な目録の作成とその維持である。そのためには内外に有料で提供してもよいのではないか。タダほど高いものはないという意味を持つ言葉を、世界各地の民族がもっているのは面白い。言語は地域・民族と固く結びついていることは述べたが、世界中でこの言葉が言われているということは、人類の経験から生み出された普遍的な真実なのだと思う。

現在のように、オリジナル書誌を多く作成する館も機械的に書誌をダウンロードするだけの館も全く同じ「参加館」という名称で括られ、目録データのチェック機能も相互信頼に任せられ、典拠コントロールすら確実なものではない書誌ユーティリティからは、真面目な館ほど負担は増えるばかりだ。

高品質維持の具体的な方策としてオリジナル書誌作成、流用書誌作成、ダウンロードのみの価格をそれぞれ決めて、運用したらどうか。そして書誌修正はどこの館も書き換えができるというのではなく、修正権限を持つ図書館をその実績(オリジナル書誌、流用書誌作成件数など)から決定して修正権限館とし、書誌の品質を保つために責任を持って行なわせてはどうか。修正の必要に気付いた館は自館で修正するのではなく、修正館に連絡して修正してもらおう。典拠コントロールおよび典拠ファイルの修正などは書誌データベースの根幹にかかわるところだ。典拠、書誌の修正は修正権限館のみが行なえるように早急に制度を変えるべきである。

日本の学術情報目録データベースをより良いものに築き上げていくとい

う使命感と相互信頼という崇高な倫理観に基く共同分担目録という旗印を掲げるだけでは、人が変わり、図書館の経営環境が変わったときに、21世紀のNC総合目録データベースは、品質(国際的な学術書誌ユーティリティからは信頼されない)とコスト(ILLと同じように大規模所蔵館の負担増加)の点から早晩空洞化してしまうだろう。

質の高い製品 = 目録を作成し、品質を維持すること。これは総合目録データベースの将来および日本の学術情報の信頼に関わることではないのか。慣れ親しんだ学術情報センターという名称はまもなく情報学研究所(仮称)にかわる。知識を組織化したものが目録である。情報はそのままではパーツにすぎない。知識と情報は違う。情報という言葉の氾濫する中で、21世紀の日本の知識はどうなるのだろうか。

7. 日本語書誌データベース

私は、多言語国家であれ、共通語が一つという国であれ、自国の言語で記された図書・資料の書誌データベースは、その言語を使用する国が責任を持って作成すべきあると考えている。自国の言語で書かれた出版物は、通常その当該国が一番多く所蔵しているし(出版文化の根づいていない国や戦争や災害による経済的疲弊で図書を持つことが困難な国もあるが)、なによりも言語はその国の文化・歴史と不可分であり、その国の言語を母国語とする人間の読み書き、理解が一番確かなはずだ。

現在、英語が国語、共通語となっている国は世界中に存在している。英語図書の出版件数も非常に多い。中国語、スペイン語を話す人々も五大陸に広がっており、それらの図書の出版件数も多い。なぜなら、彼らは古くから海外に移住、進出してきたからだ。しかし、日本語はそうではない。日本語を母国語と同じように読み書き、理解できる外国人は、英語や中国語、スペイン語などに比較すればその数は絶対的に少ない。日本国内の出版件数は多いが、世界中で競って日本語の学術資料を収集しているわけではない。必要になったときは、ネットワークを通じて書誌・所蔵確認をしてILLで申し込めばよいだけだ。NCの総合目録データベースを通じて日本の多くの学術情報は世界に公開されているのである。だからこそ、書誌データ

ベースはグローバル水準の品質が求められるし、日本語という難しい言語の目録は日本で責任をもって作成すべきなのだ。

8. 目録 – 後世に残るもの

目録にしか書名が伝えられていない図書は洋の東西を問わず多くある。しかし、目録に残っているからこそ、現在に生きる私たちはそれを知り、著者を思い、時代をそして歴史を知ることができるのである。

鶏助集 / 井伏鱒二著——ケイジョシュウ。ごく最近NC総合目録データベースで目録業務をしていたとき遭遇した事例である。思わず目を疑ってしまったが、漢字を間違えているだけではない、そのヨミまで間違えているところから推測すると、この目録をとったカタログガーは鶏肋＝ケイロクという言葉を知らないのである。井伏鱒二氏は先年亡くなったが、今後、天災や人災で、『鶏肋集』の原稿も印刷された図書もすべて失われ、『鶏助集』と記された目録のみがこの世に残ったら、後世の研究者はそのタイトルから、20世紀に生きた井伏鱒二という作家には『鶏助集』（ケイジョシュウ）という作品があり、その作品名から次のような内容を想像をすることもかもしれない。この作品は、まもなく食肉にされる運命の鶏を哀れみ、作家自身が石清水の放生会に鶏を解き放った顛末（「顛」という字は正しくは、眞と頁の組み合わせからなるが、1983年に改訂された新JISコードでは「顛」に変更された。ただし、『広辞苑 第5版』や『字通』などで「てんまつ」をひくと「てん」は眞と頁の組み合わせからなる字で表されている。コンピュータによって文字が変わっていく事例であるが、小、中学校の漢字の書取り試験で「てんまつ」を「顛末」と書いたら×になるのではないか）を記したのだろうか、それとも関を告げる鶏を助けるということは、新たな時代に賛同する作家の意思表示が記された作品なのだろうか...と。

書名に『鶏肋』という言葉冠するものは、中国、日本ともに古くから多く行なわれている。たとえその本を読んだことがなくても、図書の書名やその来歴を知っていることはカタログガーという仕事をするための必要な条件なのだ。

『鶏助集』ようなレベルのミスは特別なものではない。枚挙にいとまがないほどだ。目録は引ければよいのか。しかし、記述が間違っていたら引けないし、間違いのまま記録に残ってしまうのである。

外国語の図書を整理するのと異なり、日本語図書は日常使用している言語であるからこそ、辞書を引いて確かめることをせず、目録系の知識のレベルで目録作成をしてしまうことが恐ろしい。日本語図書の目録にはヨミがあることも、アルファベット言語と異なるところだ。

なぜ、自分は一冊の図書の目録をとるのか、問題はここのところだ。その意味をよく理解していれば、人類の知識に対して如何に自分が何も知らないかということに、言語に拘らず目録をとるたびに謙虚になるはずだからだ。

夕暮れの地中海に輝く残照のように人類の記憶に残るアレクサンドリア図書館はその建物も集められた図書もすべて失われてしまったが、その当時の様子を記録した書物や目録の断片によって、どのような図書が収集され、整理され、活用されていたかがわかる。人類の最も古い図書館の一つである二ネヴェの王宮図書館には目録も残っている。

文字の国中国、図書の国中国。中国にこのような冠称をつけて呼ぶのは理由がある。紀元前1100年ころに河南省安陽県小屯付近で国家を形成していた殷の遺蹟からは、亀の甲羅や牛の肩甲骨に記されたいわゆる甲骨文字が発見されているし、中国は文字によって歴史や学術などを記すということを紀元前から盛んに行なってきたからだ。

『論語』、『孟子』などの諸子百家の著作、汨羅に身を投じて死んだ楚の忠臣屈原の著『楚辞』、中国の正史の筆頭におかれる司馬遷の『史記』。これら紙発明以前の著作は竹簡、木簡のうえに文字によって記された。書き記すことにおいて中国人ほど情熱を傾けた人間たちはいない。フェアバンクの名著『中国』⁶⁾によると、中国では近代以前においては他のどの言語よりも多くの記録文書を残しており、1750年までに中国で出版された書物は、当時の世界中で出された出版物を合わせた数より多かったという。

紀元前から営々と記録を残してきた中国であるが、その中国においても古来焚書や歴代王朝の禁書、或いは天災、戦乱などによって目録にしか書名、著者名を留めていない図書は本当に多い。雲散霧消してしまった図書

はどれほどあることだろう。記録に残っていないということは、「無い」ということと同義なのだ。

図書は炎の中に消えても(為政者による焚書だけではなく、その図書の価値を知らない無知な司書によって貴重な図書が製紙業者に売り渡されたこともあるし、暖をとるため燃やされたこともあるのだ)、著者と書名だけが目録に残されているものがある。そのとき目録作成者が正確な記述を残していなければ、将来の学問に対してどのような言い訳をすればよいのだろう。とうの昔に故人となり、骨は土と化した著者に対してもそうである。彼或いは彼女の生きた証である図書とその記録である目録を、カタログーのミスによって後世の人々に正確に伝えないなどということは許されるべきことではない。

9. 再び文字のこと – 文字の誕生と図書館

言葉と文字による伝達の違いは、前者が聴覚によって理解されるものであり、後者は視覚(点字は触覚によって理解されるものであるが、その表記法は音節文字や音素文字に近く、記録を保存できるという点で文字の一つである)によって理解されることである。

人類が文字を持ったのは、今から5100年ほど前のティグリス、ユーフラテス両大河下流域の沃野においてといわれる。それは、この200年くらいの間に相次いでなされたこの地域での大量の粘土板文書の発見から推測されるものである。

そこに記されているのは、家畜や穀物、土地等の売買の記録や契約書、国王の詔勅、任官表、天体の運行表、戦争の記録、朝貢国からの献納物リストなどの経済、行政文書だけではなく、民族に伝承された神話、神や英雄を称える叙事詩、楽譜、卜書、地誌、そして医学や数学、天文学、植物学、農法、言語学、歴史学など様々な分野の学術著作も含まれている。さらにこの中には、所蔵目録や文学作品の目録など二次資料も多くあり、そのことは、文書が意識的に収集され、分類・整理を経て、一定の基準に従って所蔵されていたことを窺わせ、図書館の原型がすでにそこには認められる。

古代の国家、帝国の版図が拡大し、共同体の構成員が増加するにつれ、情

報のやり取りも増加した。言葉による伝達は、人間の記憶にしか内容を留めないという点で相互の理解に齟齬が生じたり、長い時間の経過は記憶の細部を薄れさせる。また、現在のような音声記録装置がなかった時代では、生の声が届く範囲にしか情報は伝達されない。

現在でも宗教の秘儀や藝の伝承は、少数の特定の既知の人物間で一言一句も変えずに口伝えで行われているものもあるが、不特定な未知の多数の人間のあいだで行われる経済や外交活動、法律の施行、徹底などには、言葉による伝達は不確実であり、共通認識に信頼を欠く。文字による記録が、古代文明が発祥した世界の各地域で早くから行われたことは、人類の発展において必然であったのである。

文字の発生を考えると、思い浮かべる話がある。『旧約聖書』創世記に記されているバベルの塔と『淮南子』(劉安撰 前178?-前122年)本経訓にある蒼頡の話である。

バベルの塔の話は、地上に住む人間たちがすべて同じ言語を持っていた頃、彼らは集まって共同で天に達する高い塔を建て始めた。神に挑戦し、人間の力を誇示しようとするその行為に怒った神は、言葉が同じということがこのような行為を生み出す原因であると見て、彼らが互いに語っても通じないように言葉を乱してしまう。言葉が通じなくなった人間たちは、集まって事を成すことができなくなり、全世界にちらばっていったというものだ。

蒼頡は中国古代の皇帝である黄帝の史官であった。蒼頡は人並みはずれた容貌で、四つの目を持ち、眼光するどく世界を見渡し、天地万物の様々な現象に基いて、文字を創造したといわれる。人間が増え、社会の構造が複雑になると、彼はそれまで行ってきたような口承によって歴史を伝えることができなくなったに違いない。歴史を記述する史官という職業柄、彼にとって文字の創造はまさに、「必要は発明の母」の言葉通りである。

魯迅が『門外文談』⁷⁾の中で「文字はだれが作ったか？」で蒼頡のことをとりあげて、「眼が二つだけのわれわれ風情では、能力はむろんのこと、容貌からして不適格なのだ」と述べているのは愉快である。

文字は通常一人の力で作成できるようなものではなく(パスパ文字のような例外はあるが)、まして漢字の字数の多さと複雑を見ると、漢字創作

の鼻祖である蒼頡は、崑崙に住む神々と同じくらい凄いパワーの持ち主であったことは想像に難くない。漢字創造を成し遂げた蒼頡は何処に去ったか伝えられていないが、天を驚かした彼を崑崙の神々が迎え入れたとも思えないし、その容貌も西王母のお気に召したとはとても思えない。もっとも彼女の本性である「豹尾虎齒にしてよく嘯く」姿であれば、蒼頡も気後れしないで会うことはできたろう。その姿ならば彼女に西王母などという優しげな漢字を当てることはしなかったにちがいない。

その後、蒼頡は則天武後の宮廷にそっと招かれ、しばらくそこで働いて文字を作ったあとは、中国周辺の南蛮北狄東夷西戎の宮廷を経巡っていたのかもしれない。異狄の地をととの昔に去ったあとは、どこへ行ったのだろう。白雲千載空しく悠々のみか。

さて、バベルの塔では神が、人々の言葉をばらばらにして、塔の製作を中止に追い込んだが、蒼頡の文字の創造に対して、中国の神はどうしたか。

「蒼頡の書を作るや、天、粟を雨らし(ふらし)、鬼、夜哭す」、即ち蒼頡が文字を作ったことにより、以後、農耕を棄てて文章を仕事とするものが続出して、ゆえに米粟が不足し、民の飢えるのをおそれて、天が(あらかじめ)粟を降らし、鬼は文字によって弾劾されるのをおそれ夜な夜な泣いたというのである⁸⁾。

旧約聖書の神と中国の神の、それぞれの神の反応の違いは大変興味深い。バベルの塔の話も、蒼頡の話も、いずれも人間が文字を手中にしたことが、神を大いに驚かせた話である。それは神ないし諸々の不可視の存在の管理下にあった知識の扉の鍵を、初めて人間が手にして扉を開け、広大な知識の宇宙へ或いは知識の迷宮へ、または不遜、驕慢という底無しの暗黒の穴倉(遺伝子操作や深刻な環境破壊に思いがいたる)へ第一歩を踏み出したということである。

インターネットは世界をつなぎ、英語は世界語といわれ、世界中の人間と瞬時に情報交換、情報伝達ができるといわれるこの時代に、バベルの塔と蒼頡を思いおこすのは決して意味のないことではない。神話や伝説には、警告やそれを回避する知恵が伝えられているからである。

さて、文字による記録が増加すると、やがて意識的にそれらを収集しようという試みが現れてくる。文字によって記されたものには、絶大なる神

の知恵や宇宙の秘密、賢い人間たちの知識が沢山あって、神が天上の支配者ならば、地上の支配者は自分であると宣言した者たちにとって、それはぜひとも必要だったに違いない。彼らは強い権力を背景に競って文書を収集した。その収集方針が記された粘土板が、19世紀中葉にメソポタミアのニネヴェから発掘されたアッシュールバニパル王(在位 前668-前627)の王宮図書館から発見されている。

そこには、アッシュールバニパル王の言葉として「アッシリアに写しがない貴重な粘土板を探し出し、余のもとに持って参れ。汝シャダヌが汝の庫に粘土板を保存せよ。而してなんびとも粘土板を差し出すことを拒んではならぬ。余はいま神官長ならびにボルシッパの市長に宛ててその旨申し送った。なんらかの粘土板もしくは祭儀文を見つけしときは、それを求め、手に入れ、余のもとに届けよ」⁹⁾。シャダヌとは蔵書を管理する図書館長であろうか。別の粘土板には「アッシュールバニパルは記念のために、而して粘土板を閲覧できるように、それを書かせ、改定させ、王室に展示させた」⁹⁾と記されており、収集方針から、目録作成、閲覧までトータルに王宮図書館の運営を考えていたことがわかる。

この王宮図書館から発見された粘土板は2万2000個にも上り、最も古いものは紀元前2100年まで遡る。彼は楔形文字を完全に理解していたといわれ、多岐に渡る分野の蔵書の殆どに目を通していたと思われる。

為政者が絶大な権力を背景に、書かれた記録を収集しようとするのは、アッシュールバニパル王ばかりではない。蔵書が50万巻、70万巻、90万巻(巻はパピルスによる)ともいわれる、古代地中海世界最大の図書館であるプトレマイオス朝のアレクサンドリア図書館も、歴代の王たちの豊富な財力と強引な手法で図書を収集したし、小アジアに起こったアッタロス朝の王たちは、アレクサンドリア図書館に刺激を受けて、首都ペルガモンに神殿附属のペルガモン図書館を建設し、プトレマイオス朝の王たちに勝るとも劣らぬ強引な手法で図書を収集した。最盛期にはその蔵書は20万巻を超えたといわれる。

ペルガモンはパーチメント(perchiment)の語源となったが、古代の世界百科事典であるプリニウスの『博物誌』¹⁰⁾は羊皮紙について、「プトレマイオス(プトレマイオス朝)とエウメネス王(アッタロス朝)が図書館のこ

とで敵対関係にあったとき、プトレマイオスがパピルス（羊皮紙）の輸出を抑え、ペルガモンで羊皮紙が発明された。」とあるが、この両王は前2世紀に生きた人物であり、羊皮紙の技術は前10世紀には存在しているので、この話は歴史的には正確ではないのだが、古代世界においてアレクサンドリアとペルガモンの両図書館がともに非常に著名な存在であったことを十分に窺わせるものである。

また、この二つの図書館は単に蔵書数を拡大しようとしただけでなく、双方ともに、ヘレニズム、オリエント世界各地から著名な文献学者、詩人、科学者等を招いて図書館運営を任せている。

アレクサンドリア図書館では、キュレネ出身の詩人であり文献学者でもあるカリマコス（Kallimachos、前305頃-前240頃）が、『ピナケス』120巻（pinakes）という目録を作り、著作を詩人、法律家、哲学者、歴史家、雄弁家その他に分類して、それをさらに細区分し、著者をアルファベット順に排列して、作品解題と簡単な著者紹介をしたといわれているが、現在は伝わっていない。ここではテキストクリティークも盛んで、その後の西洋における文献学（philology）の基礎はほぼここで完成されたといわれる。

古代世界においては、知識は万人に開かれたものではなかったが、王たちの図書館では、収集した図書の分類・目録作成が行われ、外国の図書は翻訳し、保存のために書写し、注釈を施し、販売することも行われていた。カルロ・M・チポラの『読み書きの社会史』¹¹⁾を見ると、古代社会の「市民」の概念は現代とは異なるが、彼らの殆どは読み書きができたという。販売された図書は市民も読むことができたし、図書館で働く学者や書写生が、家庭教師、私塾などというかたちで、市民に図書を使って知識を伝達したことは充分考えられる。

これらの図書館は古代の様々な地域の学者が往来する研究・教育機関であり、情報が当時の尺度ではあるが公開されているという点でまさに学術情報センターであり、貴重な図書の複製を作成し販売するというアーカイブ機能も併せて持っている。

アレクサンドリア図書館が、異教文化破壊という旗印を掲げるキリスト教徒たちによって破壊され、蔵書が灰燼に帰すまで（391年）、図書はヘレニ

ズム世界全般* に渡って幅広く収集され、正確かつ詳細に整理され、公開されて、それらの地域の学術、文化の興隆・発展に大きく貢献していたことは、研究・教育支援をその使命とする現在の大学図書館の今後を展望するにあたって参考になるのではないだろうか。なぜならここには学術図書扱う図書館の原型があるからだ。

アレクサンドリア図書館を始めとする古代の図書館は、様々の利用目的を持った、年齢も階層も異なる不特定多数の利用者を対象とした近代以降の公共図書館とは異なり、まさに研究と高等教育のための図書館であった。そこに働く人たちが学者もしくはそれに準ずる人たちであったのは、彼らが学術の価値とそれを記録する意味を知っていたからだ。

そこでは選書においては、各専門分野の担当者が選書を行い、分類・目録作成においても、著者の紹介ができて、その図書の解題ができる人物が担当していた。そして利用者にとって必要な情報が正確に記述された。

私は学術図書を扱う図書館に働くものは学者であれといっているのではない。学者に劣らぬほどの学術への探求心を持つことは必要であるが、図書館員が学者と異なるところは、自分の能力を他者のために使うことである。そのことを理解し、良しとする姿勢があること、これが学術図書館に働く図書館員気質であると私は思っている。

ミレニアムを目前に、学術情報の国際移動が拡大する中で、グローバル水準は経済・政治だけの話ではない。学術情報を扱う大学図書館やそれらが参加してつくる学術情報データベースにおいても国際的品質基準は求められるはずだ。

中国は歴史の国、史書の国ともいわれる。そこでは史官といわれる官僚たちが、国家の記録をありのままに記録した。史官の判断や感情を差し挟まず、事実のみを記録するのである。その態度は「直筆」(チョクヒツ)とよばれる。これは中国の歴史叙述の基本精神となったものである。この直筆には有名な話がある。『春秋左氏傳』に記されている話で、襄公25年(前548年)、斉の莊公6年、権臣崔杼は主である莊公を弑し、莊公のあとに愬意の景公を擁立した。すると斉の史官は簡策(書きつけ)に「崔杼、その君

*アレクサンドロス帝国に包含された東方地域全体とカルタゴ、イタリアなど西地中海周辺地域も含む意

を弑す」と記した。これに激怒した崔杼は史官を殺した。するとその弟が立ってまた同じように記録して殺された。さらにまたその弟が立って史官の一家3人までが殺されたが、4人目の弟が同じように記録しても崔杼はもうなにもしなかったという(史官という職業の厳格さにもう何もできなかったというべきか)。この時、同じ史官である南史氏は史官一家がすべて殺されたと聞き、簡策を持って駆けつけたが4人目の弟によって記録が全うされたことを知り、引き上げたという¹²⁾。この話からは「事実をありのままに記述し、いかに後世へ伝達するか」という史官の職業意識と使命感が伝わってくる。

伝えられた記録を使うのは後世の人間である。2500年前に生きた史官の名は伝えられていない。しかし、史官の行為は伝えられてその後の歴史記述の基本となり、直筆された記録は人間の在り方にも確実に影響を与えているのである。

10．消えた職名

今秋、朝日新聞で『消えた職名』というシリーズが連載された。職業録から消えた職業に現在もついている人たちを丹念にたずねるというものがある。私はそれを興味深く読んだ。

それらの職業は1960年代までは需要が多くあったが、その後の日本における大量消費社会の出現、コストダウン(発展途上国への安価な労働力移行、一人前になるまで長い時間を要する職種の縮小化なども含まれる)、そして業務のコンピュータ化など社会の構造変化によって日本人の生活形態や価値観などが大きく変わった結果、徐々に居場所を失っていったものである。人間が長い時間をかけて培ったきたものの形や機能には、経験から生まれた知恵があり、細部一つをとっても意味がある。それらの消滅を社会の進歩という言葉で片付けてしまうのは、あまりにも無邪気であり安易すぎる。なぜならそれが消えたことによって既に影響がでてきているものがあるからだ¹³⁾。

目録作成という仕事もコピーカタロギングの出現でやがて消えていくのだろうか。すでに縮小化は始まっている。図書館の中で目録という鼓動が

停止すれば、図書や自館の蔵書を知らない図書館員（ただ図書館という場所で働いているだけのアマチュア）が増えていき、図書館全体の力が長い目で見たとき、衰退していくということにはならないのだろうか。

昔、図書館員という職業があった...21世紀の半ばには図書館員は消えた職名の中に入っているかもしれない。だれが確信をもってそうでないといえるだろう。図書館員は消え、酸性紙以前の図書だけがそこに残るのかもしれない。

11．これからの図書館員は？

これからの図書館はレファレンスの時代であるといわれる。わが図書館も2000年の新館落成の暁には、レファレンスを中心とした利用者対応部門に人を増やし、そのためにも発注・受入部部門と整理部門のリコンストラクションを進めていく予定である。しかし、人員を増やせばよいのか。

大学図書館のレファレンスは今後どのように変貌していくのか、アメリカの事例を出すことはしないが、国内の先進館といわれる大学図書館や専門図書館のレファレンス業務は図書館の将来を見る上で参考になる。

インターネットの進展は目覚しく、ユーザーインターフェースも徐々によくなり、先進館といわれる大学図書館では、インターネットやLANを通じてデータベースを公開し、自身で検索させている。

利用者がそれぞれのデータベースの特徴や検索方法について知り（利用者教育こそが今以上にレファレンス係の重要な仕事になる）、データベースの内容を知り、検索技術を身につけた利用者が、自身で検索して得た結果にはそれなりの納得感があることは間違いない。とくに自然科学や社会科学の教員や院生においてはそうである。すくなくとも隔靴搔痒の感は免れる。自然科学系データベースの図書館員による代行検索は徐々になくなっていくだろう。レファレンスやILLにおいても、来館することなく行うメールレファレンスや利用者からオンラインでのILLの依頼も今後増加するに違いない。そのような時、必要なことは多数の人間がレファレンスカウンターにいてはなくて、専門的な主題知識を持ち、目録情報を正しく読みとることが出来て、自館の蔵書を含めて図書資料を知っている

(当然類書もよく知っている。目録の経験なくしてどうして幅広く図書を知ることができるか)、少数のレベルの高いレファレンス係ではないだろうか。そして忘れてはならないのは、沢山の知識の引き出しを持つと同じに、カウンセラーのようなインタビュー能力である。

利用者対応の現場にいと、カウンターにくる利用者の中には、自らの求める主題がまだあまり明確になっていない、或いは係員に上手く伝えられないなどということにしばしば遭遇する。そのような場面では、問いかけによって上手に主題を引き出してやるのが大事である。これには相当な訓練がいるし、何よりも適性が大きい。

「残念ながら見当たりませんね」と利用者という前に、それはレファレンス系の知識の引き出しの中身があまりにも僅かだからかもしれないし、蔵書を知らないからかもしれない。そして実は利用者の求めているものを上手に聞き取れていないのかもしれないのだ。レファレンスのカウンターにいるものは、これらのことを今よりもっと謙虚に自覚しなければならないだろう。なぜなら、情報リテラシー教育が行き渡り、ユーザーインターフェースも良くなると、利用者自身が上手な検索技術を身につけるようになるからだ。今後利用者がレファレンス係を訪れる理由は、技術的なアドバイスではなく、レファレンス係が図書、資料＝知識の専門家だと考え、その視点からの専門的なアドバイスを求めてくるようになるだろう。

1999年10月21から22日の2日間に渡って慶應大学三田キャンパスを会場として行われた私立大学図書館協会の研修会は、レファレンスがテーマであったが、その中で今回の講師でレファレンスについての論文も多く発表している東洋大学社会学部助教授の戸田愼一氏が、図書館の中で決してなくならない仕事として2つの業務をあげている。

1つは選書＝コレクションの構築であり、2つ目は目録作成である。なぜ、図書館において目録作成が必要か。それは目録が正確で、かつ必要な情報が記述されていればレファレンスサービスは不要であるというのである。目録の機能が十分に満たされていれば、利用者は容易に確実にその求める資料と結びつけられるのである。

では、目録が整備されていればレファレンスは不要か。彼は続けて、これからのレファレンス係は今までのように広く浅い知識ではなく、狭くて

も深い知識を持ち、付加価値の高いサービスすなわちコンピュータの隙間を埋めるレファレンスサービスが必要であり、単なる技術論だけでは立ち行かなくなるだろうと述べている。さらに戸田氏は専門職について、変えていいものと変えてはいけないもの、残さなければならないものの判断ができるのが専門職であると定義していたことは、私も全く同感である。

コンピュータは物事を標準化する。本来そのような性質のものである。だれでもある程度のところまでは短期間の訓練と経験でできるようになる。そういう意味では、コンピュータは業務を総アマチュア化するといっても過言ではない。マニュアルとフォーマットさえ理解すれば誰にでも行えるようになる。そのような中で専門職といわれるのは、マニュアルにないものや必須ではなく任意とされているものの必要性への判断だ。この判断業務の積み重ねが専門知識を作っていくのである。マニュアルレベルまでの業務からは、専門職は生まれない。

バブル期を頂点として世間では総合職がもてはやされ、明治大学でも研修では「職員はジェネラリストたれ」と言われた。図書館員の異動も館内だけではなく、大学全体に範囲を広げておこなうようになったのはこのころからである。建前はいろいろあげられるだろうが、コンピュータはまさに仕事をアマチュア化するを実行に移したものである。学部事務や法人部門とは異なる教育支援の場である図書館を学内の多くの職員に経験してもらうことは賛成だ。ただ、図書館には専門的な知識と経験を持ち、さらに適性のある人間しかできない業務があるということだ。図書館から外部へでた人間は、図書館外でも十分に仕事はできる。その反対に外部から、図書館の専門的な業務をする部署にきた人間は大変だ。図書館もコンピュータ化以前に比べると、とくに経験を積まなくてもだれにでもできる仕事は多くなった。しかし、コンピュータによる業務が増えたからこそ、さらに専門的な能力を持たなければ難しい仕事は存在するのである。すべてを一律にして外部との異動を行うことで、算術が引き合わないのは図書館であることの方が多いのだ。

12．場所としての図書館

知識の系譜を辿ると文字に行き着き、歴史の霧の中から図書館の姿が見えてくる。人類最初の図書館は何処かということについては、勿論正確にはわからない。なぜなら滅び去った文明の持つ図書館が、未だ地底深く、或いは河底や海底に眠っているかもしれないからである。考古学的な新発見がなされれば最古というお墨付きはいともあっさり覆る。現在認識されている事実はすべて相対的なものであり、ゆえに19世紀に生きたシュリーマンはトロイを発掘し、プラトンによって記されたアトランティス発見の夢は、20世紀が終わろうとしている今も人類を探索に駆り立てている。そのきっかけとなったのが、紀元前に生きた一人の或いは多数の人々によって語り継がれてきた人間の思索の記録＝図書であることを、図書館員である私たちは意識すべきである。

図書館の蔵書は人類の知的活動と同時に愚かさの記録のモニュメントである。インターネットでバーチャル空間を渉猟する前に、自館の図書館を知的な神秘空間(未知との遭遇の場)と捉えて目的も無くさまよい歩く楽しみもあるはずだ。蔵書構築は長い時間と膨大な費用がかかっているだけではなく、その大学の先人たちの研究・学習成果の履歴でもある。

未知の森深く踏み込むとき、道案内は知識の宇宙を知っている図書館員だ。知的渉猟の場としての図書館は、まだまだ未開拓のままである。宇宙の創生の秘密からマルチメディアの書物までありとあらゆる人間の思索と行為の歴史が眠っている。図書との出会が一人の人生を変えることはある。年をとって疲れた時に休息の木陰を与えてくれるのは若いときに読んだ本である。これほどの場所は大学の中でここだけだ。場所としての図書館は(倉庫という意味ではなく)、これからも生き続けるはずだ。問題はいかに活用するかである。

宇宙を図書館になぞらえた文学者もかつていた。あのボルヘス(彼はミゲル・カネー市立図書館の薄給の図書館員だった! 政権からの圧迫など様々な辛酸を舐めたのち、国立図書館長を勤める。今年は生誕100年である)でさえ、自分はこの地上の書物のほんの一滴の甘露を味わったにすぎないと述べている。かれは予め視力を失って、初めて薄明の中で光り輝く知識を

見ることができたのだろうか¹⁴⁾。まるでオーディンのようだ。ゲルマン神話の主神オーディンは知恵を得るために自らの片目を犠牲にしなければならなかった。その代償に得たものは言葉と思考を記録するルーン文字である。『イーリアス』、『オデュッセイア』の作者と伝えられる《峨峨たるキオスに住む盲目の人》であるホメロス、40年という長い年月を費やして『群書類従』を著わした塙保己一、彼らがみな盲目であったことはなにか象徴的である。知識を獲得するために人も神も古来なんと沢山の代償を払ってきたのだろう。

私たちの祖先は、愛の言葉や哀悼を表現する時は、言葉よりも手紙のように文章で表すほうが、気持ちを伝えやすいことを知っていた。これからも媒体は変化しても文字で書き記すという行為は、けっしてなくなるだろう。文字で表現するということは、言葉を自分自身の内面に一度還元して自己と対峙する必要がある。考えるという行為を経るのである。様々な本を手にするものの愉悦、そして記録を正確に未来へ手渡すことの厳格さ。カタログーは死んでも目録は残り、それを使う人間は1000年以上のちの世界にも存在するのである。

13．おわりに

学術情報の記録を後世に伝達するという視点から、目録の持つ意味を考えてきた。しかし、現在では、目録作成を図書館から手放してしまったところも少なからず存在する。一度放棄された知識や技術を再び取り戻すことは難しい。

過日、詩人の長田弘氏の著書『本という不思議』¹⁵⁾を読んでいたら、岩波写真文庫第100冊目の特集『本の話』からの引用が目にとまった。明治大学図書館は残念ながら『本の話』を所蔵していないので、長田氏の著書から書き写す。

「一冊の本は世界を動かす力を持っている。その恐るべき仕事に携わっているものが、自己の責任を考えずに自分の利益だけを追求したり、自分のやっていることの意味がわからなかったりしたらこれほどやっかいなことはない」。長田氏はこの文章を引用した後で自身の言葉で「その厄介な

ことにいまは巻き込まれている時代である」と述べている。その同じ頁で「今日もっとも不必要とされるものは、いままではもっとも必要だったものの、経験です」とも述べている。経験とは知恵だ。知恵が失われれば知識は伝わらない。

これらの言葉は、作家や詩人という言葉や文字による創作をする人たちだけ向かって発せられたものではなく、文字によって記されたもの、すなわち図書（記述される媒体が紙であれ、电脑上であれ）に関わる仕事についている人間すべてにも発せられた言葉であると思う。

20世紀の最後の20年間は、情報通信技術の目覚ましい進展によって、人間生活の殆どすべての分野においてその方法が著しく変化した時代である。しかし、近年とみに方法論が目的化し、その本質となるものが忘れられつつあるという危うさを感じる。情報通信環境の変化のスピードは、経済原理と密接に結びついていることを私たちは覚えておくべきだ。そこではともすれば重要ではあるが維持に費用がかかるもの、対象が少数に限定されるもの、声高に叫ばず地味で目立たないものは、縮小され切り捨てられていく。これらは一般の経済原則には当てはまるものかもしれないが、知識を維持し、再生産していく大学や研究機関では、単純に経済原理だけでははかれないものがあるはずだ。知識の維持管理、生産、公開は本来費用がかかるものであるのは、東西の大学の歴史や図書館の歴史を見ても明らかである。

14. おわりのおわり

『目録をとるということ ― 記録をする意味 ―』という題名をもつこの文章の中で、知識という言葉は一つのキーワードでもあったが、ここでは知識は大学の専売特許であるとか、知識を権威化して大学だけに囲い込むなどということを述べようとしたのでは勿論ない。大学にはかつてそういう時代もあったが、現在はそうではないし、今後も知識は開かれて行くだろう。ただし、大学が専門的な知識を蓄積して生産し、学問の発展に大きく関わることは変わらないはずだ。この大学の目的ゆえに、図書館は少数ではあるが、知的活動支援の専門家集団によって動かされるべきもののな

だと思う。業務の電腦化が進み、図書館の中には従来と較べ、短期間の訓練で誰にでもできる仕事の範囲は広がった。しかし、だからこそ、専門家でなければできない仕事も増えたのである。これらの専門家を如何に確保し、活かしていくかが今後の大学の教育・支援に大きく関わってくるところなのだ。

世界の教育・研究のトップに位置する大学がいずれも優れた図書館を持っているのは偶然ではない。蔵書と図書館のサービスの質が、研究・教育に大きく寄与しており、そこで働く図書館員もそのことを十分に自負しているからだろう。このことは一方で研究・教育のレベルがその図書館のレベルを決めると言えるかもしれない。

図書館はだれのために、何のためにあるのかということを図書館員は常に問うことが必要だ。しかし、大学にもまた同じ問いが發せられるのだと思う。

人類が文字を手に入れて以来、時間は止まることなく流れていく。自己の存在理由に意識的でなければ、何ものも残ることはできない。

目録の在り方について問題提起をしたが、当然それは図書館全体について考えることになった。21世紀の大学図書館はどうなるのだろう。今、一瞬立ち止まって深く考えるということ、これが図書館の未来に大きな意味を持つ行為になることを私は信じるものだ。

現在、目録作成の仕事についている若い館員だけではなく、これから図書館の仕事をしていくすべての若い図書館員が、図書館における目録というものについて深く考えてくれることを望んでいる。

この文章を書くに当たって、沢山の人々に教えを乞いました。飯澤文夫さんにはこの文章全体について助言をいただきました。NCの現況とその用語の使い方については明治大学図書館整理課の平田さくらさんに教えてもらいました。そして、利用者の立場からいつも貴重な意見を述べ、励ましてくれる大学生の娘三輪に、それぞれ心からの感謝をいたします。

註

- (1) 『説文解字』第四篇上「羊在六畜主給膳也」
- (2) 『淮南子』卷八本經訓「昔者蒼頡作書, 而天雨粟, 鬼夜哭」
- (3) 『旧約聖書』出エジプト記 20-7「あなたはみだりにあなたの神ヤハウェの名を唱えてはならない」。名前を呼んではいけない, 或いは呼ばれてはいけないの禁忌は世界各地にある。中国でも実名を忌む風習から本名とは別に字や諱をつける規定も『礼記』, 『儀礼』にすでに現れる。名前を明かされることによってその霊力が失われてしまうという民間伝承は日本では「大工と鬼六」, イギリスでも Jacobs , Joseph 編『English fairy tales』に採録されている「Tom・tit・tot」などがある。
- (4) ・「文字改革は世界の文字に共通する表音文字の方向に進まなければならない」(毛沢東)
 - ・「漢字が減びなければ, 中国は必ず滅びる」(魯迅)
 - ・「大衆の立場からいえば, 漢字を廃止することのみが中国文字改革運動の正しい道である。それに学習という点から言って, ラテン化は簡筆字や注音字母よりもずっと便利である」(茅盾)
 - ・日本でも幕末に前島密(1835-1919)が十五代将軍徳川慶喜に『漢字御廃止之議』を建議し, 漢字を廃止し, 表音文字(仮名)を採用するように述べている。(『前島密』山口修著 1990年吉川弘文館刊)
 - 「国家の大本は国民の教育にあり, その教育は士民を論ぜず, あまねく国民に施し, 普及させるにはなるべく簡易なる文字文章を用いなければ成らぬ。」
 - 「すべての学問は, その真理を理解することにある。そのためにはわが国においても, 西洋諸国のごとく, 音符字(仮名)を用いて教育し, 漢字を用いることなく, ついには日常の文章にも漢字の使用を廃止するよう致したい。」

前島密はその主張に従って、明治6年(1873)『まいにちひらかなしんぶんし』を創刊した。

- (5) OCLC(Online computer library center)
 - ・1967年アメリカ オハイオ州で発足。コンピュータネットワークによる図書館情報資源の共有化を目的として設立された非営利社団法人。世界最大規模の書誌, 所蔵数, 参加機関を持つ書誌ユーティリティ。1998年7月現在で書誌数3900万件(年230万件ほどの割合で増加), 所蔵数6億6千万件, 参加機関数2万7千館, 参加国63ヶ国。
- (6) 『中国』上 p39～(Fairbank, John King 著 市古宙三訳 東京大学出版会 1972年刊)
- (7) 『門外文談』第2章p6～「字是什麼人造的？」(魯迅著 江南書院 1956年刊)
- (8) 註(2)をみよ
- (9) 『司書』p19～20(Rost, Gottfried 著 石丸昭二訳 白水社 1994年刊)
- (10) 『プリニウスの博物誌』巻13-21「ヒツジについて」(Plinius Secundus, Gaius 著 中野定雄ほか訳 雄山閣出版 1986年刊)
- (11) 『読み書きの社会史：文盲から文明へ』第2章p25～「古典期より十八世紀までの識字力」(Cipolla, Carlo M. 佐田玄治訳 御茶ノ水書房 1983年刊)
- (12) 『春秋左氏傳 襄公二十五年』(新釈漢文大系 32, 鎌田正著 明治書院 1977年刊)

「大史書曰, 崔杼弑其君。崔子殺之。其弟嗣書。而死者二人。其弟又書。乃舍之。南史氏聞大史盡死, 執簡以往。聞既書矣, 乃還。」
- (13) 精密機械を作るために必要な測定器や半導体などの基礎となる部分は熟練した職人による手作業でなければどうしても上手く作ることが

できないが、現在では技術が受け継がれず、日本企業の中には台湾や東南アジアなどでそれらの人材養成を行なうところもでてきている。

- (14) ボルヘス、ホルヘ・ルイス (Borges, Jorge Luis 1899-1986) ボルヘスの一族は遺伝的眼疾を抱えており、父親もボルヘスが15歳の時には既に視力を失っている。ボルヘス自身も早くから眼疾に悩まされ、40歳のころには、既に失明の危機が訪れている。
- (15) 『本という不思議』(長田弘著 みすず書房 1999年刊)